



独立行政法人文化財研究所 東京文化財研究所 2002

National Research Institute for Cultural Properties, Tokyo

〒110-8713 東京都台東区上野公園 13-43 <http://www.tobunken.go.jp>

遠山文部科学大臣が 東京文化財研究所を視察

遠山文部科学大臣は6月26日、東京文化財研究所を訪れ国立科学博物館との共同研究のため同研究所が保管しているトヨタコレクションを観覧されました。同コレクションは主に江戸中期から明治初期の「からくり」「測量・天文」「銃・大砲」「医学」「書画・絵画」「生活」の分野の作品を国立科学博物館がトヨタ自動車(株)より受託している貴重な科学技術資料です。今回は1,300点余の中から特に重要で代表的なものを中心に陳列し、遠山大臣は渡邊所長とともに職員の説明で、質問も交えて終始にこやかに観覧されました。その後、同研究所黒田記念館を視察され黒田清輝の代表作「湖畔」「智・感・情」等を鑑賞されました。

(管理部・渡邊仁之)



オルゴール「蝶のさえずり」の説明を受ける遠山大臣



「湖畔」を鑑賞される遠山大臣

国際交流基金の助成による 黒田清輝に関するフランス調査

このたび、「明治大正期にフランス留学した日本人美術家に関する日仏共同調査研究」のテーマで国際交流基金より日本文化紹介派遣助成を受け、山西健夫(鹿児島市立美術館)伊藤史湖(久米美術館)両氏とともに、5月26日-6月1日の日程で、パリおよびグレ・シュル・ロアンでの調査を行いました。

今回の調査は、美術部で現在行っている「黒田清輝に関する再評価のための調査研究」に鑑み、1884年から1893年までフランスに滞在した黒田清輝(1866-1924)の留学中の足跡を現地調査によってより明らかにすることに焦点を絞りました。パリ市内では、幾度も転居した黒田の居所跡、絵画を学んだアカデミー・コラロッシ、師ラファエル・コランの住居などの跡をめぐり、それぞれの位置関係、地理的環境などを確認しました。また、当時の美術雑誌やサロンの目録・図録等を調査しました。資料の所在状況、調査方法などについては、フランス国立東洋言語学研究所(INALCO)のクリストフ・マルケ助教授の協力を得、現地の日本美術史研究者たちとの情報交換を行って指針を得ました。



黒田が絵を学んだアカデミー・コラロッシの跡

黒田が充実した制作を行ったグレ・シュル・ロアンには、その滞在と制作を記念して、昨年10月「黒田通り」が誕生しています。その命名に関わったモワンヌ・前田恵美子氏の協力により、黒田の居所跡およびその土地台帳、代表作「読書」「婦人図(厨房)」のモデルとなったマリア・ピョとその家族の戸籍などの資料をグレ市役所で調査しました。その成果は「黒田清輝展」(7月18日-9月1日、鹿児島市立美術館)図録の山西氏論文にも反映されています。

黒田に関しても未調査の資料が現地には残されています。今後、黒田のみならず、同時代にフランス留学した日本美術家たちについても現地調査が行われることが期待されます。

(美術部・山梨絵美子)



黒田が写生に訪れたグレのペンション・ローラン

講談の記録作成事業

芸能部では、昨年度から講談の記録作成事業に協力しています。

講談は、平成9年度に「記録作成等の措置を講ずべき無形文化財」に指定されましたが、平成13年度から本格的に記録作成事業が始められました。文化庁から委嘱を受けて東京と大阪で調査と記録をおこなっている講談調査推進委員会(会長・田邊孝治氏)の活動に協力する形で、同委員会に芸能部から宮田繁幸と児玉竜一の両名も加わり、芸談の聞き取り調査に参加するとともに、芸能部の実演記録舞台を使用して実演記録会を催しました。

実演記録では、現在の講談界を代表する存在として充実期を迎えつつある、一龍齋貞水師と宝井馬琴師の技芸を記録することを主たる目的としています。両師ともに、講談の定席が健在であった時代に修業をつまね、一席読切ではない講談本来の長大な続き物に独自のレパートリーを持っておられます。今年度はとくに続き物の完演を記録するために、実演記録会を重ねています。

時代物・世話物から怪談まで幅広い芸域をほこる一龍齋貞水師は、時代物の「時頼廻国記」と世話物の「緑林五漢録」。先代ゆずりの修羅場を得意とする宝井馬琴師には、「太閤記」の中から口演の機会の少ない「賤ヶ岳の合戦」をお願いしています。これまで5回の実演記録会は以下の通りです。

平成13年3月20日 宝井馬琴「曾我紋尽し」「明智左馬助湖水渡り」

平成13年3月28日 一龍齋貞水「田宮坊太郎初見参」「大島屋騒動 忠孝二筋道」

平成13年6月5日 宝井馬琴「太閤記 大徳寺焼香」

平成13年6月11日 一龍齋貞水「時頼廻国記 馬方問答」「緑林五漢録 木村の夜船」

平成13年7月17日 宝井馬琴「太閤記 賤ヶ岳の合戦」

この間、7月には一龍齋貞水師が、講談界から初めて重要無形文化財保持者の認定を受けるとい、斯界にとっての慶事もありました。実演記録は9月以降も継続する予定です。

(芸能部・児玉竜一)

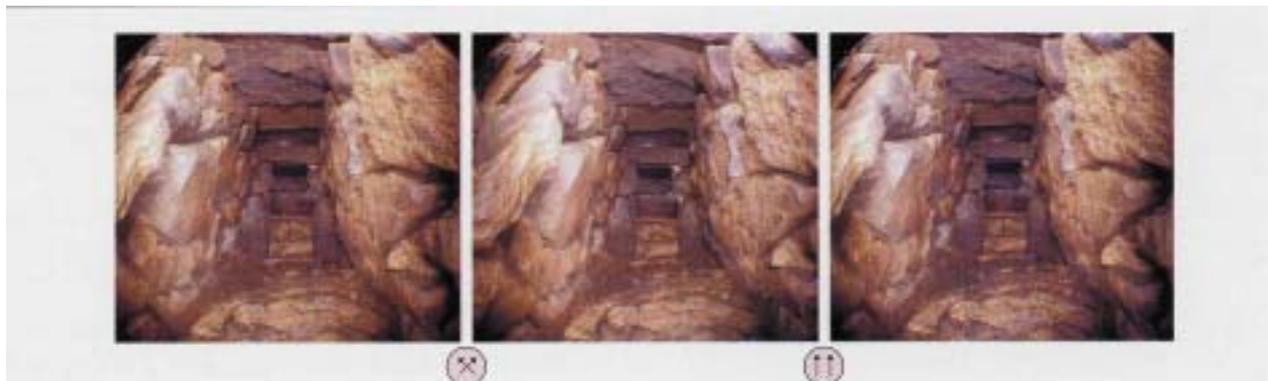


7月17日の実演記録会の模様

3次元デジタルセンサーによるフゴッペ洞窟と前二子古墳の計測と研究

科学技術振興事業団との共同研究「文化遺産の高度メディアコンテンツ化のための自動化手法」の研究サイトとして、新たに北海道余市町所在の「フゴッペ洞窟」(国指定史跡)と群馬県前橋市所在の「前二子古墳」(国指定史跡)を加えました。

フゴッペ洞窟は、海水の浸食によって形成された自然洞窟ですが、洞窟の岩壁面に続縄文時代(およそ2,000~1,500年前)とされる舟や魚、翼や角で仮装して踊る人などの線刻画が描かれている遺跡です。岩壁表面の崩落や彫刻の風化が著しいために、30年前から洞窟前面に覆い屋を設け、温・湿度を一定に保つための設備を整え、



前二子古墳石室のステレオ(立体)写真(前橋市教育委員会提供)。左の2枚は交差法(右目で左の写真を、左目で右の写真を見る)で、右の2枚は平行法(右目で右の写真を、左目で左の写真を見る)でご覧下さい。交差法は寄り目にして、平行法は遠くに視点をおきます。

また、見学者のためのガラス張りのカプセルを設置しています。この見学者用カプセルが今年度から2年の工期で改修されることに伴い、工事中に洞窟内全体の計測が可能となるために、研究サイトに加えることになりました。フゴッペ洞窟では、洞窟内を3次元デジタルセンサーでどのように計測できるか、岩壁面の線刻画を詳細に記録できるかなどを試みます。

前二子古墳は、6世紀前半築造と推測される前方後円墳で、石室は羨道と奥の玄室に区分され、壁面、床面、天井面は大小の石で構成されています。しかし、これらの石は、経年変化、地震、盗掘、後世の積み直しなどにより大きく変位していて、一部の石は大きくはらみ出て、積石の間に空隙が生じています。このために、今年度から3年をかけて古墳内部の石室の一部を解体して修理することとなりました。古墳石室の解体工事はあまり例を見ないもので、貴重な機会です。研究サイトに加えました。解体前の石組みの複雑な状態を3次元デジタルセンサーで正確に記録するとともに、積み直し後の状態との比較検討を試みます。また、変位している多数の石の修理積み直しのシミュレーションを行い、3次元デジタル計測技術の文化財修理への多面的な応用も計画しています。

(国際文化財保存修復協力センター・斎藤英俊)

先史時代芸術の保存に関する会議

2002年5月23-24日、ラスコー洞窟壁画など先史時代の芸術の保存に関する会議がパリの人類古生物学研究所で開催されました。主催はIIC(国際保存学会)フランス支部です。参加者は地元のフランスを中心に、スペイン、イタリア、ベルギー、アンゴラ、ノルウェー、メキシコ、カナダ、米国、ブラジル、オーストラリア、ニュージーランド、イランなど18ヶ国から約150名、日本からは筆者が参加して、史跡フゴッペ洞窟の保存について発表しました。

ここではフランス、マルセイユの近くで1985年に発見されたコスケール洞窟壁画について紹介します。この洞窟は海面下36メートルの深さに入り口があり、さらに175メートルも入った奥に、牛、山羊、鹿、馬、ペンギンなどを描いた100以上もの絵があることがダイバーによって発見され、そのダイバーの名前にちなんで洞窟名がつけました。著名な考古学者のジャン・クロット(今回の会議の基調講演も行いました)らが調査した結果、それらの絵画は前期(27,100年前)と後期(18,500年前)に分かれ、ラスコー洞窟よりも古い時代のものであることがわかりました。壁画が描かれた当時、海面は今より150メートル低かったそうですが、現在は入り口が海面下にあるために、公開はおろか、内部調査も難しく、発見後15年以上経っても適切な保存対策を立てることは困難です。そこで洞窟のある崖の真上に当たる場所から掘り進んで、洞窟へのアクセスを新しく作ることが検討されています。しかし長年調査に当たっているポルドー大学のフィリップ・モローラン、ジャン・ヴーヴェ、歴史記念物研究所のジャック・ブリュネ氏らは今回の会議で、新たな問題を指摘しました。測定結果によると洞窟内の圧力は1気圧よりも常に高くなっていて、もし外界への開口部をもうけると海水が洞窟内へ侵入し、壁画は海面下に没してしまいます。洞窟壁画保存の難しさを改めて考えさせられました。

(保存科学部・三浦定俊)



見学したアルシー・シュール・キュール洞窟入り口

アジア欧州博物館 ネットワーク第1回会合

1996年3月、アジアと欧州間の関係強化に向けて、ASEAN（東南アジア諸国連合）諸国に日本、中国、韓国を加えたアジア10ヶ国首脳と、欧州15ヶ国・ECの首脳がタイのバンコクに集まり、アジア欧州会合が開催されました。それを契機に、アジア・欧州間の人的交流、知的交流、文化交流のため、アジア欧州財団が設立され、現在、教育から文化まで幅広い活動と支援を行っています。アジア欧州博物館ネットワーク（ASEMUS）は、この財団によって支援されている博物館交流事業です。スウェーデン国立世界文化博物館内に事務局が置かれて、館長が議長を務め、日本からは内田弘保元文化庁長官が執行委員となっています。その第1回会合が2002年4月10日から13日まで、オランダ国立民族学博物館（ライデン）で開催されました。この博物館は、江戸時代に日本からわたったシーボルトコレクションを所蔵し、エンゲルスマン館長はしばしば日本を訪れています。また長年京都の宇佐美修復工房で修業していたフィリップ・メレディス氏が勤務していて、同館の作品だけでなくヨーロッパ各地の東洋絵画の修復も行っているなど、日本とも大変なじみの深い博物館です。

会議には日本から、文化庁の派遣により内田元長官の他、国立民族学博物館の久保正敏・吉田憲司教授と筆者が参加しました。全体会議の他、アジアと欧州の保存修復技術の交流、アジアの欧州観と欧州のアジア観に関する巡回展、アジアと欧州の傑作コレクション2500点の仮想現実展示など、5つのワークショップに分かれて議論が行われました。アジアセミナーなどで東文研がこれまで日本に招聘した、東南アジアからの研究者も何名か参加していましたが、4日間にわたる活発な討論の中で、アジアからの参加者が流暢な英語でヨーロッパの人々に負けずに、しっかりと自分たちの意見を主張していた姿が大変印象的でした。

（保存科学部・三浦定俊）



保存修復技術の交流に関するワークショップ

フォローアップ研修・ 地域研修（新潟）の開催

博物館・美術館等の保存担当学芸員研修は、昭和59年に始められ、今年で19年目を迎える長い歴史を持った研修で、これまでの研修生数も358名に上ります。しかし、文化財害虫の防除の考え方が新しくなったように、保存担当学芸員にも新しい知識が必要になってきています。そこで、本研究所の保存担当学芸員研修受講者を対象に、資料の保存に携わる学芸員がその職務に必要な最新の知識を持てるよう、昨年度より保存担当学芸員フォローアップ研修がスタートしました。昨年は、16名の研修生の協力を受けて試験的に行いましたが、今年は、全受講生に案内を出したところ、101名の参加がありました。研修は、6月17日（月）に東京文化財研究所のセミナー室で行いました。研修内容は、1．湿度制御の考え方 - 資料の水分制御 -、2．照明の考え方 - 累積照度 - 3．空気環境の諸問題 - 室内汚染物質 -、4．生物被害防除の新しい考え方 - IPM - で、この5年ほどの考え方の変化や学問・技術の進歩に絞ってプログラムを組み、中身の濃いプログラムとなりました。研修終了後のアンケートの、次回はいつ受講したいかという問いに対して、毎年でも受けたいが35名、2～3年に一度程度が43名と、継続してフォローアップ研修を受けたいという希望が多く見られました。

また、保存科学部では、各地域の博物館協議会や教育委員会と共催し、講師が地方へ出張して行う保存環境地域研修を行っています。今回は6月25、26日に新潟県立近代美術館の講堂を会場に、新潟県博物館協会と共催で地域研修を行いました（参加者76名）。

プログラムは以下の通りで、参加者が全般的な知識を得られるように、毎回ほぼ共通した内容で講習しています。1．保存環境概論と環境調査、2．温湿度制御と管理、3．空気環境の制御と管理、4．照明の制御と管理、5．これからの生物被害防除法。



フォローアップ研修の質疑応答の様子

この後、本年度は12月に三重県で開催する予定です。地域研修実施についてご希望の地域団体がありましたら、担当の保存科学部石崎・佐野までぜひお問い合わせ下さい。

(保存科学部・石崎武志)

伝統的修復材料に関する調査会

修復技術部では、平成13年度より伝統的修復材料に関する調査研究を行っています。本研究は、従来、修復者が経験的に使用してきた糊・膠・漆などの修復材料の物性や特性を自然科学的に解明し、素材の再評価と改良を目的としています。その研究の一環として6月19、20日に沖縄県から宮城清氏を迎え、琉球漆器の堆錦に使用する焼漆と琉球螺鈿の煮貝に関する調査会を行いました。近年沖縄県では、漆工人の老齢化や工場閉鎖などにより伝統的な琉球漆器の豚血下地や焼漆の製造方法が失われつつあります。今回の調査会は、正統な琉球漆器の技術記録の作成にまたとない機会であると考えています。

焼漆の調査では温度測定や製造工程の調査を行いました。中国産の透漆を小型計量カップに入れ、アルコールランプで加熱しながら漆の水分を取り除く作業を約1時間半続けました。作業開始から15分間で漆中の水分が泡になって蒸発し、白い煙があがりました。その漆は、表面温度約115度で泡立ちがなくなり、臭いも焦げ臭くなりました。臭いの変化は、漆工人が受け継いだ焼漆の目安のひとつです。表面温度が低いのは、漆中の水分蒸発時に起きる放射冷却のためと考えられます。それから表面温度が一気にあがり、1時間10分後には210度の最高温度に達しました。漆の常温硬化は、酵素反応を契機として酸化重合によって起こります。それに対し、高温硬化における重合が約210度で酸化から熱へと変化したことが今回の調査で判りました。常温で冷却した焼漆は飴色で粘度の高い漆になりました。

煮貝の製作は、あらかじめ1～3日間海水で煮た夜光貝を金槌でたたきながら螺旋状に剥いでゆきます。3日間煮た夜光貝は、金槌で叩く振動で容易に剥がれましたが、1日間のものはほとんどはがれずに粉碎してしまいました。

今回の調査会では、講師による製作工程のデモンストレーションを講習者の目で行うことにより、修復技術部の研究員、東京芸術大学の教官および大学院生、修復家などと活発な意見交換ができました。

(修復技術部・加藤 寛)



焼漆の製造工程を説明する宮城氏

イギリス・ドイツにおける 鉄道関連文化財の保存について

6月5日から14日の日程で、イギリス・ヨークの国立鉄道博物館とドイツ・ベルリンのドイツ技術博物館における鉄道車両と鉄道関連施設の保存修復に関する調査を行いました。

ヨークの国立鉄道博物館は、世界有数の鉄道博物館ですが、その保存修復の方針は、多くの来館者に鉄道に興味を持ってもらうことを第一の目的としています。この目的から、鉄道車両は完成直後のように美しい状態を保っています。

この方針が成功していることは、中年女性のグループなど、我が国では同様の博物館には期待できない非常に幅広い来館者を得ていることからわかります。一部には、収集直後のままの車両もあって、文化財としての展示に関して試行錯誤をしていることが感じられます。修復工房を公開し、その修復方針を実物で示しています。日本の0系新幹線車両については、英国で発想され実現できなかった鉄道システムの成功例として展示されています。

これに対してドイツ技術博物館では、扇形機関車庫の一部を廃墟のまま残し、開館から今までの数十年で植物に覆われた様を示し、文化財の保護



植物に覆われた博物館の一部

には不断の努力が必要なことを示しています。車両の多くも保存上問題となる汚れや構造上不可欠な補強をのぞき、収蔵時の状態を示して、その車両の社会的意味に重点をおいた展示をしています。

(修復技術部・川野邊 渉)

龍門石窟研究院との共同研究開始

東京文化財研究所による中国龍門石窟の保存事業は、龍門石窟の保存に関して 保存担当部門研究者の育成、石窟の保存修復に関する研究、

石窟の写真撮影、などを龍門石窟研究院と共同で行うことを主な内容として、すでに3年に及ぶ交流の実績を持っています。さらに平成13年秋から5年間にわたるユネスコ日本信託基金による龍門石窟保存プロジェクトが実施されるにあたり、当研究所はユネスコの依頼を受けたコンサルタントとして、中国側専門家と共同でプロジェクトの計画立案、実施にあたっての技術指導を行うという、重要な役割を担うことになりました。

ユネスコプロジェクトは、ユネスコと中国国家文物局が契約し、私たちが作った5年間の計画にもとづき、国家文物局の委託を受けた洛陽市文物局と龍門石窟研究院とが実施するものです。最初の3年間は、石窟内外の各種劣化、病害等の観測、降水後の山における水分移動の計測、詳細記録の作成など、基礎的調査と保存修復処置の研究とにあてます。そして残りの2年間で、試験窟として選んだ3つの洞窟を利用して、具体的な保存修復作業を実施します。

本年3月に龍門石窟研究院がそれまでの研究所から改組されて人事の異動があったことと、ユネスコプロジェクトに関して現地における地質計測および測量会社の契約が遅れたため、着手には少々手間取りましたが、6月には3週間にわたって実験窟におけるデジタル精細画像による写真撮影を実施し、また同時に4カ所のボーリング坑を利用した自動地下水位温度計の設置、赤外線デジタルカメラによる洞窟内表面温度の観察、デジタルビデオカメラによる漏水状況の定時観測などの作業を開始しました。これから、ユネスコプロジェクトを中核としながら、当研究所と龍門石窟研究院との共同研究が本格的にスタートします。

(国際文化財保存修復協力センター・岡田 健)



ボーリング坑に設置した自動地下水位温度計からデータを読みとる馬朝龍研究員(龍門石窟研究院保護研究室)

カンボジア・アンコール遺跡で実施中の石材保存実験

独立行政法人文化財研究所理事長とカンボジア政府アンコール・シェムリアップ地域保護管理機構(APSARA)総裁との国際協力に関する合意書、ならびに東京文化財研究所長とAPSARA文化部長との国際共同研究についての覚書に則り、アンコールのタ・ネイ遺跡をフィールドとした共同研究を進めています。

その中で、遺跡石材のケミカルパック法によるクリーニングとシリコン樹脂含浸による強化防水処置の現地実験を行っています。ここでのクリーニング方法は、世界的に広く応用されているモーラ法をベースに、微生物の繁殖に伴う汚れも除去できるように改良を加えたものです。ペースト状の薬剤溶液を石材表面に塗りつけ、ラップで覆って水分の蒸発を防ぎつつ1週間程度放置した後、木製ヘラでペーストを除去してから、プラスチックブラシで水洗します。この作業を2~3回繰り返すと、石材の汚れ(堆積物、表面で結晶化した石膏層、付着繁殖した微生物<黴類・地衣類・藻類・蘚苔類およびその死骸>)が除去されます。クリーニング後は撥水性シリコン樹脂を含浸して、表面層を強化するとともに防水性を与えて、再度の汚れを防止します。

現在タ・ネイ遺跡では、APSARAの若手研究者により、石材の材質/汚れの種類/薬剤の配合比/処理時間とクリーニング効果との関係についてのシステムチックな実験を行っていて、その経過は、逐一、画像を含めてメールで報告されて来ます。東文研スタッフは年に3~4回現地を訪れ、詳細な調査と研究協議を行って、実験計画を策定しています。この実験研究の成果は、2002年12月にアンコールで行われる国際シンポジウムで報告し、また、2003年3月までに英語/日本語/クメール語による報告書を作成する予定です。

(国際文化財保存修復協力センター・西浦忠輝)



石材クリーニング実験を行うAPSARAの若手研究者

第 26 回世界遺産委員会 (ハンガリー・ブダペスト) 出席報告

2002年6月24日から29日までハンガリーの首都ブダペストで第26回世界遺産委員会が開催されました。この委員会では、アフガニスタンからの最初の世界遺産「ジャムのミナレットと考古遺跡」を含む9つの文化遺産が新たに世界遺産リストに登録されることとなりました。同国の遺産は、1983年に4件の遺産が審議延期となっていたまま、その中に含まれていたバーミヤンの大仏破壊事件が起きたところでしたので、今回の登録は待たれていたところです。Raheen 情報文化大臣が出席され、お礼の言葉を述べられました。委員会は、同国の遺産保護を支援するためのアピールを採択しました。

今回登録された9つの文化遺産を含めて、世界遺産の総数は730となりました。世界遺産委員会では、遺産の数が増えすぎていることを懸念しています。無形の価値への配慮など、気づかれないままにしている遺産の種類の発掘を進める一方で、ポスト・インスクリプション、すなわちすでに登録されている遺産の保存をきちんとしていこうと、委員会はモニタリングシステムなどそのための支援策の整備を進めてきました。遺産内外での開発計画の有無や、それをコントロールするための保存計画の有無などについて、委員会は慎重に審査する姿勢になっています。ツーリズムも重要な要素です。

今回の委員会でも、昨年登録されたばかりのウィーンの歴史地区のバッファゾーンでの新ビル建設計画が問題となり、リストからの削除も視野に入れた議論がなされました。とりわけ不動産文化遺産の保存にとって障害となる要素は、きわめて複雑で多岐にわたっています。持続可能な保存のための保存計画、マネージメント・モニタリングシステム開発のための研究の重要性が指摘されています。

(国際文化財保存修復センター・稲葉信子)



世界遺産都市ブダペスト、ブダ城からドナウ川をはさんで
ペスト側の国会議事堂を望む



文化遺産の審査

東京美術商協同組合から寄付金を受入

東京美術商協同組合から、東京文化財研究所が行っている文化財に関する調査・研究等の結果発表にかかる出版事業に役立てて欲しいとの趣旨で寄付金の申し出がありました。

平成14年5月24日(金)渡邊明義所長が港区新橋の東京美術商協同組合において、東京美術商協同組合役員立会いの上、浅木正勝理事長から現金100万円の寄付を受領しました。

その後、東京美術商協同組合役員の皆様と文化財保存・修復について懇談し、当研究所の事業に御理解をいただきました。

このような厳しい時期に研究所の事業に御理解を賜り御寄付をいただいたことは、研究所にとって大変有難い朗報でありました。

東京美術商協同組合の御厚情に報いますよう、研究所の事業に役立てたいと思っております。

(管理部・川柳成巳)



浅木理事長から寄付を受ける渡邊所長

外国人来訪者

来 訪 者	所 属	年月日	目 的
ラスール次官以下4名	アフガニスタン文化情報省次官他	14.7.16	意見交換及び視察

(管理部・渡邊仁之)

黒田記念館 公開カレンダー

黒田記念館は、9月14日より、**土曜日も公開**します。開館時間：午後1～4時 入館料：無料

2002																				
9							10							11						
1	2	3	4	5	6	7	1	2	3	4	5					1	2			
8	9	10	11	12	13	14	6	7	8	9	10	11	12	3	4	5	6	7	8	9
15	16	17	18	19	20	21	13	14	15	16	17	18	19	10	11	12	13	14	15	16
22	23	24	25	26	27	28	20	21	22	23	24	25	26	17	18	19	20	21	22	23
29	30	27	28	29	30	31	24	25	26	27	28	29	30							

特別公開：10月29日(火) - 11月4日(月) 午後1時 - 4時 (台東区上野の山文化ゾーンフェスティバル期間中)



黒田清輝 湖畔 1897年 カンヴァス・油彩 69.0cm×87.7cm 重要文化財



黒田記念館 外観

編集後記

おかげさまで独法初年の成果報告を終えることができました。今後も研究の充実に加え、より広く外部へ評価を問う姿勢が求められるはずですが、今秋には美術部・芸能部の公開講座を予定しております。また黒田清輝の「湖畔」や「智・感・情」といった代表作を展示・公開する黒田記念館も、来館者の方々のご要望に答え、9月から従来の木曜日にくわえ土曜日の午後にも開館するはこびとなりました。とかく近寄りがたいイメージのある研究所ですが、これらのイベントや公開施設を通してより多くの方々とふれあうきっかけとなれば、と思っています。

TOBUNKENNEWS No.10 2002年9月

発行：独立行政法人東京文化財研究所

編集：協力調整官 情報調整室